

## **第3回**

# **全国産業観光フォーラムinかごしま・報告**

作成・平成16年3月1日

**遺産は知産、古き知産を磨いて地域を開く**

**負の遺産(財産)は残すべき**

(開催日) 平成15年10月24日～25日

(場 所) 鹿児島市・かごしまサンロイヤルホテル他

**(報告者)**

**志免町議会議員**

**古庄信一郎 ・ 吉田耕二**

## 【 概 要 】

「産業観光アイランド九州を考える～近代化遺産と現代産業の融合」をテーマに日本の近代化を支えた工場跡や遺構などを活用した新しい観光戦略について考えるフォーラム(表記)が鹿児島市で開催され、志免町の「立鋳櫓」を中心とした炭鋳遺跡の有効活用のヒントとなればとフォーラムに参加した。

フォーラムには全国から約650名の参加があり、その顔ぶれも、中央・地方自治体、議会、商工会、学会、企業と多種多様でフォーラムへの注目度の高さが伺えた。

初日24日はオープニングとして鹿児島商工会議所副会頭、東海旅客鉄道(株)代表取締役会長、九州運輸局長、鹿児島県知事、鹿児島市長がそれぞれ挨拶をされ、基調講演として多摩大学教授・望月照彦氏が「産業観光アイランド九州を考える～古き知産を訪ね、新しき知恵を創る」をテーマに講演をされた。

パネルディスカッションはメインテーマについて(財)九州経済調査協会情報研究部長・鳥丸聡氏をコーディネーターに4名のパネラーが意見を述べられた。

その後、3分科会が開催され、第一分科会「テーマ・近代化遺産と産業観光」に参加する。

翌日25日は産業視察として8コースが設定され私達は「鹿児島市・近代産業発祥の地を歩く」に参加する。

写真…フォーラム会場前にて 左・吉田 右・古庄



※ 以下主な語録とポイント、遺跡視察の内容、私達の考察を報告いたします。

-----  
【主な語録・ポイント】…… 志免町・立鋳櫓有効活用の観点から……

### 「開会の挨拶から」

◇ 名古屋地域は物づくりの地域で残っている産業遺跡や現在活動している工場等を観光資源にして産業観光を始めている。全国で同じような事をやっている地域と議論しようと言う事で始めたのがこの会の趣旨。観光は50兆円の生産力がある産業、日本経済にとって観光振興は重要な事柄。(東海旅客鉄道(株)代表取締役会長 須田寛氏)

◇ 観光は21世紀のリーディング産業。観光の原点は単に名所や風景を見るだけでなく地域に住む人々がそれぞれの地域を誇りに思う、その地に住む事、幸せに感じる事、その地域から光を発するという面もある。

個々の観光客が主体的に学び、癒し、遊びを選択して、参加、体験する新しい観光旅行が人気。その一つとして実際の生産現場、技術や製品といった産業施設、歴史・文化的価値のある機械、器具、工場遺構が観光資源として認識される時期で、その地域に根づいた産業の価値を再認識すべき。(九州運輸局長 大庭靖雄氏)

◇ 鹿児島には日本の近代化に大きく寄与した産業遺産、尚古集成館や曾木発電所遺構など貴重な遺跡、史跡が数多く残っている。さらに焼酎、黒牛、黒酢、2つのロケット基地など産業観光の観点からも資源の宝庫。 (鹿児島県知事 須賀龍郎氏)

「基調講演から」 …… 多摩大学教授・望月照彦 氏

(テーマ・産業観光アイランド九州を考える～古き知産を訪ね新しき知恵を創る)

◇ 今日の話のコンセプトは「地域が生み出した知恵を磨いて新しい21世紀の知恵を創って行こう」です。

◇ 産業と観光を結びつける方程式は「近代産業×現代産業＝観光産業×未来産業」イギリスのバーミンガムがその例で、アストンサンエンスパークという昔の産業遺産を見事に活用して未来産業と未来型観光とした。



写真：基調講演

◇ 21世紀型観光は「びっくり仰天型から知の感動観光へ」がキーワード。

◇ 21世紀型観光産業の最大商品は、地域産業とその遺産。パリのベルシーでは昔の古いワインの倉庫の建物を「旅とお祭りの博物館」に転用し世界中から人を集めている。

◇ 産業観光の宝島・九州。古いものから未来型まで実に素晴らしい形で産業遺産が存在しており、まさに世界の産業アイランド。

◇ お客が地域に来て何を産業観光の対象にするか。1つ目はその地域にある資源の物理的な価値で、その中に技術の遺伝子が残されている。2つ目はそれを培ってきた歴史や文化層の厚さであり、産業観光の大切なところは人間観光でもある。3つ目はその地域で生み出された構想力。

オランダの技術者が尚古集成館を見て驚いたのは、溶鉱炉では無くそれが全体の構造として、ネットワーク化されている。「振り返れば未来」。

◇ 地域の元気を生み出すために ①産業の原資(産業遺産)を発見する。②その原資を分析研究し磨き上げる。③交通体系アクセスを整備。④地域のサービス。⑤情報ネットワークコンベンション。⑥市民のホスピタリティマインドを発掘。⑦グローバル化対応のレベルアップ。

◇ 産業を見ることによって子供は感動をおぼえる。  
地域構想力が日本の未来を創るには、構想力を持つ子供たちが鍵を握ると思う。

◇ 産業観光は地域に光を当てその地域の知を未来に向け起爆させる。21世紀、我々は子供たちに何を残し、何をすることができるのか、そのことも産業観光から学ばなければならない。

## 「パネルディスカッションから」

(テーマ・産業観光アイランド九州を考える～近代化遺産と現代産業の融合)

- ◇ 九州は観光王国と呼ばれ、バブル期にシーガイア、ハウステンボスが出来たが破綻した。そういった中わずかな資本で集客力を高めてきた地域が黒川温泉、湯布院、阿蘇ファームランド、門司港レトロ、豊後高田市の昭和の街づくりとか。歴史的な産業遺産に多くの人が集まるのでは。  
(コーディネーター・(財)九州経済調査協会情報研究部長 鳥丸聡氏)

- ◇ 地域の知名度をあげるためには、大勢の人に  
来てもらって交流をしなくては。そこで気が付いたのが産業遺産の存在だった。  
トヨタ自動車の先祖にあたる豊田佐吉さんが  
自動織機を発明した。これが世界的にヒットし今の  
自動車産業を作っており近代産業革命はこれ  
から成り立っている。  
(東海旅客鉄道(株)代表取締役会長 須田寛氏)



写真：パネルディスカッション

- ◇ 今、近代化産業遺産が注目されているが、これはものづくりの原点で、そのものづくり日本が今  
おかしくなっている。そういう原点を見直しそれが  
子供たちに物づくりの夢を与える場として近代化産業遺産の活用が注目されてきている。  
(株)島津興業代表取締役 島津公保氏

- ◇ これからの観光産業はなるべく広域的に国際的に展開を図ることが大切。中国、韓国、台湾の人々は日本に来る場合、日本は産業国家と思ってやって来るのであり、日本の産業の現場はどうなっているのだろうか、どうしてあそこまで発展したのだろうかと言う事に興味がある。  
産業観光の留意点は広域観光、国際観光に留意すること、街づくりの一環としてやる事、歴史的な傾向をたどった観光にする事。それをやるための留意点として学習観光、体験観光の要素を入れる事。  
(日本瓦斯(株)常務取締役 津曲貞利氏)

- ◇ 九州の産業観光資源には歴史的な幅がある。三池の炭鉱とか八幡製鉄所とか。しかしこれらが観光資源として認知されていない。観光資源として周るモデルコースがない。  
まだ街づくりと一体となっていない。  
(東海旅客鉄道(株)代表取締役会長 須田寛氏)

- ◇ 私たちは産業遺産を保有しているが、ほったらかしにしていると廃棄物にしかならない。  
けれども、これを生かすのは人である。  
(株)島津興業代表取締役 島津公保氏

## 「第1分科会から」 (テーマ・近代化遺産と産業観光)

- ◇ 「市民力による近代化遺産の調査と活用」 … 日立市観光課 副参事 小野俊郎氏

日立市で一番に紹介したいのが「日立の大煙突」でこれが日立の原点であり出発点でもある日立鉱山の象徴。これは住民には思いの強いもので、企業と住民が一体となって煙害を克服したというドラマが、直木賞作家の新田次郎による「ある町の高い煙突」であり、日立市の産業観光の大きな切り口がこの煙害克服であり産業観光のシンボル。

煙害克服の歴史、鉱山、街の発展が日立鉱山創業地にある日鉱記念館で紹介され、展示品だけでなく立坑や採掘機械などが現物のまま残されている。

煙害が克服された一方、失われた自然環境回復のため大規模な植林事業が260万本の「桜」の植林でこれも産業遺産の切り口となる。

また日立鉱山が福利厚生施設として作ったのが、歌舞伎座を模した共楽館でこれは当時帝国劇場を除けば日本一であった(国の文化財指定)。

日立製作所は日立鉱山から分かれて出来た企業で、日産も日立鉱山を母体にして誕生した企業。その他の日立市の産業遺産としては、日立セメントがある。山から海岸線にある工場までの原料運搬を、ロープウェイで空中を3.8キロメートル運び、市街地に入ると地下のベルトコンベアでさらに2~3キロ運ぶ。これは全国で唯一、現役で使われているもので、これがスキーリフト技術の原点とも言われ高く評価されている。

これらの産業遺産、観光資源の活用について行政としても遺産の調査・活用の歩みが始まったばかりと認識し企業・市民との連携が大切である。

日立市でも地域のコミュニティ活動が活発でその中の1つにその地域ごとの再発見事業があり、22の小学校校区をコミュニティとしてどこを見せるかそれぞれが素材を探し、PRする活動がされ、各コミュニティが時期をずらして、市民や観光客に向けた発表会を実施し大好評である。その際資料として地域資源の概要や場所を示した地域のコミュニティマップが配布され活用されている。市としてもこの素材を見直そうと言うことで「観光交流資源調査事業」を企画し、その地域のことはその地域の住民が一番わかっているだろうということからコミュニティ活動と連携して行く。いずれにしても観光資源・地域資源の活用には市民活動などの市民レベルでの取り組みが大事あり、地域、市民グループなど市民一人一人と連携をとりたい。

## ◇ 「新居浜における近代化遺産と産業観光への取り組み」

… (社)新居浜市観光協会 理事・事務局長 前原和子氏

新居浜の産業遺産は、1691年の別子銅山の開坑に始まり、そこから派生した科学、重機械、電力などの産業、街全体の歴史まで含め、現在までのつながりで考えると実に312年間に及ぶ。

地形的観点から見ると、市街地を中心に山岳方向へ25キロ、海上方面に20キロにわたり産業遺産が点在している。これを縦に切り取ると、坑道が海拔マイナス1000メートル、標高が1700メートル、高低差が2700メートルにも及ぶ壮大な空間に産業遺産がある事になる。

写真：分科会・会場



産業遺産活用を進めて行くための体制としては、市民、行政、企業の3つの柱が必要不可欠である。新居浜では既に20年間、市民が産業遺産や歴史などの活用に向けて活動してきた。市民レベルでは17年前、青年会議所が「銅幢の街づくり」を、平成6年には銅を活かした街づくり研究会で「銅夢物語新居

浜」を提言しこれを活かすため「銅夢物語・新居浜市民会議」でイベントを開催。イギリス、フランスに調査団の派遣もしている。

行政では「住友鉄道跡の自転車・歩行者専用道としての整備」「マイントピア別子というテーマパークでの最後の採鉱本部跡の活用」「近代化の中心人物を歴史的に検証して旧邸と記念館を設けた広瀬歴史記念館の運用(旧邸は重要文化財に指定)」などが市によって行われている。

新居浜の産業遺産に関する諸活動は、当初から「学習観光」が強く意識され、新居浜そのものが、また産業遺産全体がラーニングランド・学びの地域になりうるということを強く意識していた。

知の社会、知の結集のために市はもちろん県や国のプロジェクトを巻き込んでの活用の方向性が繰り返し広げられており、2000年には国土庁のモデル事業で「産業遺産を活用した知の博物館都市づくり」に取り組んだ。2001年には県と新居浜市が「産業遺産活用モデル基本計画」を策

定。これらは産業遺産を知的資源ととらえて、それらを活かし地域そのものをオープンミュージアムにしていこうというものである。

新居浜の場合「産業観光」は「産業遺産の活用における一分野」とであると認識している。非常に大きな世界にも通用するような素晴らしい遺産を自分達の街に持っているということ意識するとフィールドは無限大に広がっていく。

最後に「新居浜は世界遺産を目指す」ことをこのフォーラムで発表したい。

◇ 「薩摩藩の集成館事業と情報発信」 … 尚古集成館 館長 田村省三氏

(集成館とは薩摩藩城下郊外(現在の磯庭園)に島津斉彬が幕末期に近代化の事業のはしりとして西洋の科学技術を導入し築かれた工場群を総称して集成館と呼ぶ)

集成館は日本初の臨海工業地帯、コンビナートで、造船・紡績・製鉄の3事業は、鹿児島で初めて事業化され、明治の時代に引き継がれ、つい最近まで日本の経済を底支えしていた。そういう意味からも鹿児島から日本の近代産業が生まれたと考えている。

九州の産業遺産を有する諸施設がもっと連携し、九州として一体となった情報発信も今後ますます必要である。

九州は原爆や公害等の負の遺産も含めていろいろな物語が語れる、そんな遺産が存在しているところなのだから。

◇ 「第1分科会のまとめ」 … 多摩大学教授・望月照彦 氏

産業観光の次のステップは市民が中軸となる市民産業であろう。

キーワードは「市民産業としての産業観光の時代が来た」

企業だけでなく地域が知識経営、つまり知識のマネジメントを始めたと感じた。

これからは知を鉱脈として変化させ、最終的には知識や知恵を見てもらおうということまできている。

発言された3人のキーワードをまとめると「これら市民産業としての産業観光」「地域知識経営・世界第1号の知産としての産業」そして「ザ・サード・ジャパン・モデルとしての産業観光」の3つであり大変大きな知恵をご提供いただいた。

**【2日目・産業視察】**

… 鹿児島市／石橋記念公園・近代日本発祥の地【尚古集成館・反射炉・ガラス工場・異人館】

① 石橋記念公園と石橋記念館

鹿児島市の中心を流れる甲突川には江戸時代末期に5つの大きなアーチ石橋が架けられた。

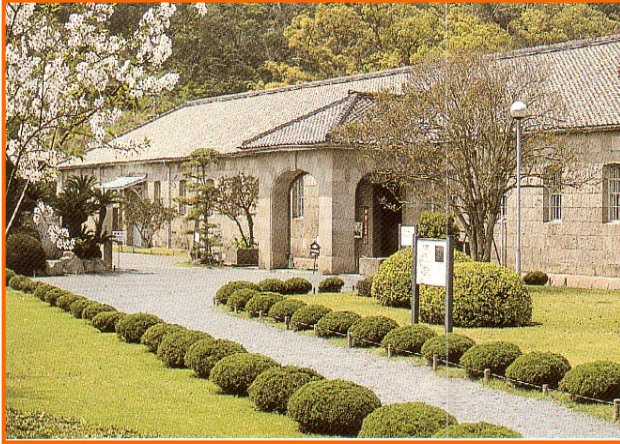
これらはその技術からして我が国を代表する石橋群で、150年間、現役の橋として利用されてきた。しかし平成5年の大水害で2つの橋が流失し、残った3橋は、貴重な文化遺産として移設して残すこととなり、5石橋の歴史や技術を伝える石橋記念館を整備して平成12年に石橋記念公園として開園し園内に復元保存されている。



## ② 集成館跡（国指定史跡文化財）

嘉永4年(1851年)に薩摩藩主となった島津斉彬は日本をヨーロッパの国々のように強い豊かな国にしなければならないと考え、製鉄、造船、紡績、電信、ガラスなどさまざまな事業(これを集成館事業という)を磯地区付近一帯に展開。反射炉、溶鉱炉などのほかにガラス工場、鍛冶場、鋳物細工所などがあった。(この工場群を集成館という)

## ③ 尚古集成館



写真…尚古集成館

尚古集成館は大正12年に開館した永い歴史をもつ博物館で、本館は慶応元年に造られた機械工場を利用して島津家伝来の史料を中心に約1万点を収蔵し展示する博物館。

## ④ 反射炉跡

島津斉彬が1854年に築かせた反射炉は高さ20メートルもあった。



写真…反射炉跡



写真…旧鹿児島紡績所技師館

## ⑤ 旧鹿児島紡績所技師館（異人館）

慶応3年(1867年)に建てられたもので、わが国における初期の洋風建築の代表的なもので現存する数少ない建物の1つ。

建物は木造2階建、四方に開放のベランダをつけたフロニアルスタイルで、当時は室内にマントルピースがすえられ、屋根には煙突がたち、裏手には台所、浴場、便所が建てられていた。

昭和34年には国指定文化財の史跡に指定され昭和37年には重要文化財になる。

## 【おわりに（考察）】

観光というものの概念が、自然・景観中心から、産業遺産や歴史を学ぶ「学習観光」というものになってきている。さらにそれらの遺産をつなぐ事によって交流、観光人口を増やし地域の元気を生み出そうというもの。

志免町の立坑櫓、ボタ山を中心とする産業遺産もそのような役目を担ってくれるものと確信をした。

（吉田耕二）

私たちは世界に誇れる近代化遺産「志免・立坑櫓」について調査・研究をしていますが、つねにその保存にあたっては、単なる保存だけでなく、地域、志免町、そして住民にとって有効活用を前提とした「街づくり・人づくりのシンボル」とすることを基本にしています。

昨年、新聞で「産業遺産を生かし観光を・近代化遺産と現代産業の融合、鹿児島でフォーラム」の記事に出会い、まさに私たちのニーズとタイムリーな催しであり、何かを得たいという期待感を持ち参加いたしました。

近代遺産と観光というものを、こんなにドッキングさせたフォーラムが全国規模で開催されていることと、参加者の多さに、まさに時代のテーマなのだと共鳴をいたしました。

また、志免の立坑櫓は「負の遺産」と言われて来たが、パネラーの津曲貞利氏は、観光で成り立つ「知覧、ひめゆりの塔」を例にあげられ「負の遺産(財産)は残すべき」と語られました。

そして全ての演者のアピールポイントは、望月教授の「遺産は知産、古き知産を磨いて地域を開く」の言葉に代表されるように「産業遺産はこれからの街づくり・人づくりに不可欠なものである」と訴えられ「志免の立坑櫓は負の遺産ではない」と強くエールを頂いた気がいたしました。

「尚古集成館」職員の「九州の近代産業遺産をネットワーク化しこれを一括して世界遺産へ」との熱い思いの言葉に大きな夢も広がりました。

「志免と中国・撫順の兄弟立坑櫓の締結を実現し、これを日中友好のシンボルとして、相互の交流と観光推進をはかる」・「人の福岡東部循環案」を平成15年11月23日開催の「志免立坑櫓の保存活用とまちづくりシンポジウム」で発表しましたが、これらの実現にむけ、力強い後押しを頂いたフォーラムでありました。心から感謝申し上げます。

（古庄信一郎）



【写真】… フォーラムの感動を胸に鹿児島からの帰りの車中で素晴らしい夕日に会うことができ、おもわずデジカメのシャッターを。

ちょうど出水駅をでて水俣市に向かう車中だったと思いますが、八代(不知火)海の先にある長島あたりに日が沈んでいるようでした。

私にとって鹿児島本線、出水・水俣間での車窓からの風景はこれが最後でした。(古庄)

（資料）

- 産業観光フォーラム in かがしま2003報告書より  
（全国産業観光フォーラム in かがしま2003実行委員会）
- 各施設パンフレット